

教 仏 名 聞

第9号
(発行日)

2011年6月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488

(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
○〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○共学会—毎月6日午後7時始
○真宗入門講座—毎月18日
午後6時半始
*8月22日の同朋の会と8月
12日の念仏座談会はお休み

長 生 不 死 の 神 方

今年の春、川西市の奥にあ
る霊園に信徒さんの納骨法要
に行った。法要後、お墓の並
ぶ間の小道を歩いてみると、
ふとある墓石に刻まれている
言葉が目に入った。その墓石
の銘に「わたしを信じる者は
たとえ死んでも生きる」と刻
まれていた。「いい言葉だな
あ」と感じながら通り過ぎた
ことであった。

これは「わたし(キリスト)
を信じる者はたとえ肉体が滅
んでも、その人は永遠のいの
ちに生きる」という意味の『
ヨハネ福音書』の言葉である。
墓を建立した人はキリスト信
徒であろう。

この言葉はそのまま「南無
阿弥陀仏を信じる者はたとえ
死んでも生きる」と言える。
これは、南無阿弥陀仏を信じ
る者は浄土に往き生まれるの
である、と言われていること
と別のことではあるまい。

死んでも生きる、死んでも
死なない、いわば不死という

利益を人に与えるもの、それ
が要するに宗教の救いであり
利益である。
これはまことの宗教だけが
言い得る領域だと言っても過
言ではない。この世の経済も
政治も科学技術も倫理も福祉
もカウンセリングも、不死と
いう利益を人に与えることは
できない。

しかも、死んでも死なない、
不死こそ人が根源的に願って
いるものである。へこの世の
人々のいとなみはすべて死か
らの逃避である」とある哲学
者が言った。経済行為も政治
活動も福祉政策も医療行為
も、つまるところ「人を死な
ないようにするためのいとな
みである」と言い得る。この
ことは、人は生き延びるため
により安全でありより有利な
ものを競って求め、そのため
に知識を求め、技術を磨き、
才能を伸ばし、人に負けまい
とする。

そればかりか、吉凶禍福を
占ったり、神社に行って祈っ

りますように「商売繁盛し
ますように」などと祈願する
のも、やはり死から逃げよう
とする行為であるといえる。

そういう私が「たとえ肉体
は死んでも生きる」と本当に
言えるものが見つかるとする
なら、これこそ本当の幸せで
はなかるうか。ヒンズー教の
聖典ともいえる『マハーバー
ラタ』の中で、神がアルジュ
ナに「この上ない喜びは何か」と
問うた時、アルジュナが「
人生の一瞬一瞬は明白な死の
予兆があるにもかかわらず、
人のいのちの不死を信じつづ
けることこそ、至上の喜びで
ある」と答えている。

では浄土真宗ではどうなの
か、というと、真宗の根本聖
典である親鸞聖人の書かれた
『教行証文類』の中、しかも
最も中核の『信巻』の一番初

めには聖人は「謹んで往相の
回向を案ずるに、大信有り。
大信心はすなわちこれ、長生
不死の神方」と仰せられてい
る。スバリ、「信心は長生不
死の神方である」と言われて
いる。真宗の信心は人が不死
のいのちを得る不思議な方法
であり、素晴らしい方法であ
ると言われているのである。

長生不死、これこそだれで
もが求めているものでありな
がら、それを獲得することができ
ずに「しかたなく」「いやいや
ながら」「不本意に」死んで
いつている。

そんな私たちに「死なない
いのち」をいただくことができ
る、それが南無阿弥陀仏の
仏法であり、往生浄土の恵み
である。

ただし、死なないといって
も、迷いの生を繰り返す意味
での生は輪廻転生といわれる
ものであって、真宗という長
生不死の意味ではない。
真宗の長生不死とは、もはや
生まれたり死んだりすること
のない、阿弥陀仏の智慧と
慈悲の功德を内質とするはか
りないいのちの生である、と
お聞かせいただいている。

正信偈に学ぶ問答

(二十一)

顕示難行陸路苦

信樂易行水道楽

(書き下し)

難行の陸路、苦しきことを
顕示して、易行の水道、楽し
きことを信樂せしむ。

(現代語訳)

龍樹菩薩は、難行道は苦
しい陸路のようであると示
し、易行道は楽しい船旅のよ
うであると勧めになる。

G 「この龍樹菩薩のお示し
になった難行道とはどういう
意味ですか」

D 「読んで字の如しで、覚
りにいたる難しい修行の道とい
うことです」

G 「難しい修行の道とは」

D 「坐禅をするとか戒律を保
つとか、経典を読んで理解す
るとか、懺悔を行うとか、内
観して自分の心の有様を知る
とか、そういう難しい行法に
よって覚りを得ようとするこ
とです。そういう修行なり実
践を私たちの側で行い、それ

によって覚りを成就していこ
うとする道のことです」

G 「なぜこうした修行は難し
いのですか」

D 「それはこれらの行が技
法的に難しいとか苦しいなど
行そのものの難しさもさるこ
とながら、それを行う人間の
方に問題があるから難しいの
です」

G 「行よりもむしろ人間の側
にこそ問題があるのですね」

D 「ええ、例えば坐禅や瞑想
を行うことはそれほど難しく
はないと思います。しかし、
それを毎日持続して行うの
は、怠け心が強く意志の弱い
私たちには容易ではありません
。また持続できたとしても、
それを行う私の心が容易に静
まらず散乱して止まないの
で、坐禅瞑想をしても覚り体
験がなかなか得られません。
ですから覚りに到達すること
が甚だ困難になるのです」

G 「しんどい修行や辛い修行
はたとえ善い事であってもな
かなか続かないですね」

D 「ええ、そういう怠け心を
懈怠といいますが、私たちは
苦しいことが嫌いで楽が好き
ですから、修行は善いとは分
かっていても続かないので
す。それでも頑張れば続ける
ことができましょう。しかし
私たち凡夫は根機(資質)が
劣っていて煩惱妄念が止みま
せんから、なかなか仏道修行
が成就しないのです」

G 「それで法然聖人や親鸞聖
人も比叡山で坐禅や瞑想を長
い間実践されたけど覚りが開
けなかったのですね」

D 「ええそうです。経典を読
む修行も同じです。経典を学
んで文字面を理解することは
頭脳のいい方ならさほど困難
ではありませんが、経典の内
容を体的に理解することは
容易ではないでしょう」

G 「頭で分かっても心の底か
ら了解することは難しいので
すね」

D 「ええ、もしお経を読んで
意味が分かり、それで体得で
きるのなら、仏教を専門に研
究している学者はみな覚れて
いるはずですが、そうはいき
ません」

G 「経典を誦読して実感的に
仏教が分かるというのは、よ

ほど優れた資質に恵まれた方
でないは無理なのです」

D 「ええ、私たちの心は羊の
眼のごとしといわれて、羊の
眼のようにトロンとしていま
す。ですからお経を読んでも、
その中に説かれている深い道
理を実感的に感得することは
凡夫には大変困難です」

G 「自分の罪業を懺悔するこ
とも難しいのですね」

D 「自分の罪を知って懺悔す
ることも同様です。自分の罪
深さが知られて悪かったとか
間違っていましたとか言って
懺悔することはできませんよ
うが、その場限りで、たとえ涙
を流して自分の悪を懺悔して
も、しばらく時がたつと元の
木阿弥で、また「自分はそこ
そこ善人だ」などと思ってい
る。だから懺悔も容易に身に
付きませんね」

G 「懺悔もそうでしょうが、
「なにごとく感謝していきな
さい」などとよく言われます。
ですが、言われた時はいかに
もその通りと思ひ、親に感謝
したり、自然の恵みに感謝す
る心も起こらぬではありません
んが、すぐまた感謝の心はふ
つとんでしまい、ややもする
とまた不足や不満をいつてし
まいます」

D 「そうなんです。また最
近よく聞くのは「阿弥陀様に
生かされていることに目覚め
なさい」なんて言われますが、
これなども本当の意味でそう
いう目覚めを起こすことは決
して簡単なことではないと思
います」

G 「「阿弥陀仏に生かされて
いる」という言葉はやさしい
ように感じますが、実際はど
ういう意味なんでしょうね」

D 「普通は、太陽やお米や水
などの自然の恵みや、先祖や
両親のお陰や、周りの人たち
のお世話などのもろもろのご
縁によって「私が生かされて
いる」というようなことをへ
仏様のお陰で生かされてい
る」と理解されているのだと
思います。ただそう納得して
それで本当に阿弥陀仏に出逢
えているかというところもは
なはだおぼつかないと思いま
す。しかも、「私は生かされ
ているから有難い」と喜んで
いる内容はともすると、まず
私の身が一番大事で、この身
をそういう縁がサポートして
くれているから有難いという
ことなら、それはやはり我が
身が一番大事という深い我愛
の心が根にあって、その我愛
の心が「大事な我が身が生か

されている」と喜んでい
いうことになりかねません」

G 「へ生かされていること
感謝」も通俗的な理解なら、

「我が身が生かされているこ
とを感謝している」というの
は、元にある我が身がかわい
いという我愛の心が喜んでい
るのだと」

D 「ええそう思います」

G 「ではよくへ今ここに生き
ている存在の事実を目覚め
よ」と言われることはどうな
んですか」

D 「へ今ここに生きてい
るの事実」、これは確かに普
遍的な真理を表した言葉だと
思います。宗教や哲学一般に
通ずる道理だと思えます。清
沢満之師が

『自己とは他なし。絶対無限
の妙用に乗托して、任運に
法爾に現前の境遇に落在せる
もの、即ち是なり。』

と自らの自覚を表現されてい
ます。ここで現前の境遇に落
在せるもの、それが真の自己
であるという。それは「今こ
こに生きてい
る存在の事実」
と言い得ま
しょう。そし
て

「今ここに生きてい
る存在の
事実」を事
実たらしめ
ているもの
、それが絶
対無限の妙
用すなわち
阿弥陀仏で
あると申

されるのでしよう」

G 「だからへ今ここに生きて
いる存在の事実を目覚めよ」
といわれるのですね」

D 「ええそうなんです。それ
は道理としてはそうなんです
けど、その事実を目覚めよと
いわれても、そう簡単に目覚
められないという事態に陥
ります。もちろん、目覚める
人もいるでしょう。しかしへ目
覚められない」という壁にぶ
つかってしまうことが多いの
ではないでしょうか」

G 「以上のような道とか方法
とかは難行道とっていいの
ですね」

D 「そう言えると思えます。
どちらにしてもへできない」
へわからない」へなれない」
という壁にぶつかってしま
います。難行道は行そのものよ
りも、それを行う人間の能力
や資質が劣っているため、た
とえ外の形は行い得ても、覚
りには開けないという人間能力
の限界にぶつかってしま
うのです」

G 「では逆にへ易行道」とは
D 「覚りにいたる易しい行
の道という意味です」
G 「易しい行とは」

「阿弥陀仏がへまるまる引
受けるから、ただ称えるば
かりでよい」と仰せ下さる称名
念仏のことです」

G 「へまるまる引受けるから、
ただ称えるばかりでよい」と
いうのは」

D 「弥陀の本願、念仏往生の
願の内容です。阿弥陀仏は法
蔵菩薩の時に、一切衆生を
自身の手だけで浄土に至らし
めて覚りの仏にしてやりた
い、助けたいと願われ、長い
御思案をされて、その結果自
らの力一つで助けるとい
う大悲の願力をへまるまる引
受けるから、ただ称えるばかり
でよい」という念仏往生の本願
に表されました。そしてその
通りに救う力を長い御修行に
よって完成されました。この
ことを積尊は『仏説無量寿経』
に説いて下さいました。その
大悲の本願の内容です」

G 「へただ称えるばかりでよ
い」といわれるのは、ただ口
に称えるばかりということ
ですか」

D 「ええそうです。私の心の
善悪淨穢や能力の有無はいか
ようにもあれ、そのまま口に
ナムアミダブツと発音するば
かりでよい、弥陀が助けると
仰せられるのです。そこでこ
のお念仏は誰でもどこでもい
つでもできる易しい行い
から易行といわれるのです」

G 「そうするとそれは人間の
能力の有無や心の有様に
関係なく、今のこの身のま
まで行なうことができる
行、それが
称名念仏なので
すね」

D 「ええそうなんです。そこ
で難行道は陸路を徒歩で歩
んでいくような道で、自分の
力をたのみにして目的地
(覺りの世界)に難しい修行
をして歩いていくような
もので、足腰の悪い人や病人
は歩めないように、能力の劣
った煩惱の深い凡夫にはた
どって行くのが困難な道
です」

G 「易行道はへ水道楽」であ
るとい
うのは」

D 「へ助ける、我が名を称え
よ」との阿弥陀仏の誓いの大
悲を信じてお念仏をもうす
ばかりという易行道は、ちよ
うど水道(路)を船(弥陀の本
願力)に乗せられて目的地へ
行くようなもので、我が力を
借りず如来の船に乗せられて
船の力で覺りの世界に運ん
でいただくのです」

G 「へ楽しきことを信樂せし
む」とは」

D 「龍樹菩薩は難行道は心弱
く煩惱深い凡夫には歩みがた
いとあきらかにお示しにな
り、易行の道は船に乗ってゆ
くような安樂な道であるか
ら、この大悲のお誓いを信樂
(信)して浄土に生まれよ、
と心弱き凡夫には易行道を
勧めに
なるのです」

G 「そうすると易行道である
浄土の教えは、どんな心の劣
った凡夫にもただける道
であり、自分の修行の力による
聖道門の道はお粗末な凡夫に
は困難な道であることを龍樹
菩薩はお示しになり、煩惱具
足の凡夫に本願念仏の法をお
勧めに
なるのですね」

D 「ええそうです。その大悲
の願力による救いを言葉にし
て私たちに、丸々引き受ける
との思し召しを知らせて下さ
るのがへ我が名を称えよ」の
仰せです。私たちはこの思し
召しが私のためであったと聞
き受けて南無阿弥陀仏ナムア
ミダブツと称えるばかり、聞
くばかりのはなはだ易しい道
なのです」

(了)



信心夜話

『一蓮院談合録より』(6)

(ゴチツクは談合録の言葉、カッコ内は私の所感)

明信寺云く。帰むという事は、これが胸につかえるうちはまだ聴聞不足なり。帰む事の胸につかえるにあらで、反つて楽しみになるが眞信心の得られた験なり。

帰むという事を嫌うは、まだ帰まねばならぬ難儀が我が心に起こらぬが故なり。

存云く。帰むばかりのお助けを心得たりとも、助かるまじきものを助け給う本願の尊さの知れざる人はなはだ多し。世上の学者多く然り。我もまたその一人なりき。

*(明信寺云く。帰むという事は、これが胸につかえるうちはまだ聴聞不足なり。帰む事の胸につかえるにあらで、反つて楽しみになるが眞信心の得られた験なり。)

(明信寺といわれた方は江戸末期に活躍された信心の深い眞宗人。阿弥陀仏は南無阿弥陀仏となつて私たちの口に称えられ、耳に聞かして下さる。その南無阿弥陀仏の言葉は「まるまる助けるで、われをたのめ」との阿弥陀仏の仰せであり、救いを告げたもうみ言葉である。こ

れが南無阿弥陀仏の意味であり、大悲の心であり、大悲の仰せである。しかるに、「助けるでたのめ」と聞かされていながら、これが胸につかえて、かえつて苦し

く思うのは、まだ「たのめ」のお心が知られていないからである。広大な大悲のお心をよく聞いていないからである。「助けるでたのめ」と聞けば、「たのむ」のは易しいも難しいもない、ただ単純にたのまざるを得ないのである。この仰せを聞いて、ああ有難い、ようこそ、ようこそこんな者をと聞いているまが弥陀をたのんでいることになっている。

しかるに、仰せを聞いても「どうたのんだらいいか」「どうおまかせしたらいいか」「なかなかたのめません」「おまかせできません」という。「たのめ」と言われて困つてしまうのである。これが胸につかえていないすがたである。阿弥陀仏が「われをたのめ」と仰せになるのは私たちが困らせたがためではない。まったく逆に私たちが真に樂にさせたいがための親切極まりない言葉なのである。胸につかえるどころか、これを聞かせていただくも重荷から解放されるのである。眞信心を得られたかどうかは、このお言葉を聞いてどう受けとつているかによつて知られる。このお言葉に困るか、それともこの言葉が嬉しいか、どちらかである。

なを帰命の帰を「たのむ」と読むのは、帰命の帰には、「よいかかるなり」「よりのむなり」の意味があると聖人は『信卷』にお示し下さっている。)

*(帰むという事を嫌うは、まだ帰まねばならぬ難儀が我が心に起こらぬが故なり。)

(次に「たのめ」と聞いて、たのめなくて困るとするのは、我が心に困りはるといふことがないからである。世間の話でも、親切な人が「私におまかせ下さい」とか「私をたのみにして下さい」と言つて下さるのを聞いて、ああ有難いと感ずるのは、私の方に難儀があり困つたことがあり重荷があつてどうしてみよもない状態だと感じていながら、そのお方の「たのめよ」「まかせてくれよ」のご親切が身に浸るのである。眞宗の救いが分からないのはこの一点である。

お念仏が分からないというのはこの一点である。本願がいただけに困り果てている故に、阿弥陀仏の「たのめ」「まかせてくれよ」の仰せが有難いのである。死と死後の行く末、また私の心をどうするか、不条理な人生はどこで助かるのかなど、こうした問題の前に立つと人は自分の無知無力無能を知る。世間の生活上の諸問題はどれほど大きくてもどうにかな

つていく。しかし存在そのものの問題はいつまでたつてもどうにもならない。存在の問題とは迷いを離れる問題であり、それが具体的な問題として死の問題や死後の問題や自身の煩惱の問題として起こってくる。こうした問題に困るのである。自分の迷い心に困るのである。たとえ死んでも迷いは残つていく。それゆえ生死流転するのである。この問題にぶつかると人は自分がすでにまったく困窮していることを知る。生ける屍であることが知られる。これにほとほと困るといふ難儀に

ぶつかつてみると、「そのままなりでわれをたのめ」といふ弥陀のお言葉は唯一無二のご親切極まりない信心であることが、何の解釈もいらすただ単純に知れる。そういう難儀にすでにありながら困らないのは酒に酔つているようなものである。聖人は「無明のさげにえいふして、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒をのみ、このみめしおうてそうらいつる」と仰せられている。酒で現実の自分を酔わせているからである。酔いら少しさめてくると、私は本当は孤独で無窮の闇に入りつつある裸の業魂にすぎないことが知れる。自身自身に困るようになるのは無明の酒の酔いがさめてきた徴である。)

*(存云く。帰むばかりのお助けを心得たりとも、助かるまじきものを助け給う本願の尊さの知れざる人はなはだ多し。世上の学者多く然り。我もまたその一人なりき。)

(存とは一蓮院秀存師のこと。弥陀の「我をたのめ」と仰せが有難くなり、お念仏を喜ぶ身になつても、喜びが乏しいのは、私が真に「助かるまじきもの」であることを心底深く感じていないからである。だから、本願の尊さが深く味わえず、喜びが薄いのである。信心をいただいても、まだまだ阿弥陀仏の大悲の無窮の深さの底はとてしなく知れぬ。「助ける」「たのめ」の大悲の仰せを聞いても身の毛がよだつほどの歓喜が湧かぬのは、自分の助からなさの知りようが浅いのである。この世の仏教学者や眞宗学者で信心のあるお方でも大方はこれである。私もその一人である、と秀存師は仰せ下さる。)